

# 社会存在論におけるメタグラウンド

坪井 祥吾 (Shogo Tsuboi) ・ 松浦 慎太郎 (Shintaro Matsuura)

一橋大学 ・ 東京大学

チンギス・ハンは西方遠征の過程で大規模な虐殺を行ったと言われる。一方で、ICC の規定（国際刑事裁判所に関するローマ規程）によると、虐殺行為に与したものは戦争犯罪人だとみなされる。さてここで、

(1) Genghis Khan was a war criminal.

チンギス・ハンは戦争犯罪人だった。

は真だろうか？ この文には、真の読みと偽の読みがあるように思われる。真の読みはおそらく次のような考えに支えられている：〈チンギス・ハンが虐殺行為に与した〉という事実のおかげで、戦争犯罪人であるという性質をチンギス・ハンは持っていたのだ。対して偽の読みを支えるのは次のような考えだろう：チンギス・ハンが活動していた13世紀にはICCは存在しなかったため、戦争犯罪人であるという性質も存在しなかった；それゆえチンギス・ハンはその性質を持ちえなかったのだ。これら二つの読みはいずれも不合理なものではないように見える。すると(1)は真でも偽でもあることになるが、このことは解明されるべき非自明な現象である。実は、同様の言語現象は**社会種** [social kinds] 全般に関してしばしば観察されるものであり、本論の目標はこの種の現象の背後にある形而上学的・意味論的なメカニズムを解明することである。

形而上学的なメカニズムの解明に向けて、私たちは**グラウンディング** [grounding] という形而上学的な依存関係を利用する。近年、グラウンディングの概念を社会種の形而上学あるいは**社会存在論** [social ontology] に応用するアプローチが注目を集めており (Epstein 2015, Schaffer 2019)、本論もこのアプローチを採用するのである。具体的には、社会種から構成される社会的事実がどのようにして成立するか——つまり、その事実がどのような種類のものにどのようにしてグラウンドされるか——についての一般的な見取り図を提供することを目指すことになる。その過程で、**メタグラウンド** [meta-ground] としての**社会的法則** [social laws] が重要であることが明らかになるだろう。チンギス・ハンの事例では、ICCの規定が社会的法則にあたる。〈チンギス・ハンが虐殺行為に与したことが、チンギス・ハンが戦争犯罪人であることをグラウンドする〉ということのメタグラウンドが、ICCの規定なのである。

さらに私たちは、以上の形而上学的考察に基づき、問題の言語現象の意味論的メカニズムの解明も行う。私たちの見解では、(1)のような文について真の読みと偽の読みの両方が存在するのは、「社会的法則が現実と異なっていたら…」というタイプの反事実的条件文が複数の読みを持つからである（そしてこのことを特徴づけるのに、社会的法則とメタグ

ラウンドの概念が有用となる)。そこで私たちは、この種の反事実的条件文の読みの複数性をよく捉えられる意味論を構築する。私たちの意味論は、本来は因果推論のために開発された**構造方程式モデル** [structural equation model] と呼ばれる形式的フレームワーク (cf. Pearl 2000) に基づいた意味論である。ただし、構造方程式モデルのオリジナルの形のままでは問題となる複数の読みを捉えるのには不十分である。そのため私たちは、**二階のモデルと介入の失敗**という新たな概念を定義することにより、表現力を強めた構造方程式モデルをベースにした意味論を提案する。

## 参考文献

- Epstein, B. (2015). *The Ant Trap: Rebuilding the Foundations of the Social Sciences*: Oxford Studies in Philosophy.
- Pearl, J. (2000). *Causality: Models, Reasoning and Inference*: Cambridge University Press.
- Schaffer, J. (2019). Anchoring as grounding: On Epstein's the ant trap, *Philosophy and Phenomenological Research*, 99(3), 749–767.